

終助詞「か／よ／ね」の意味機能とコミュニケーション機能
モダリティーとポライトネスの観点から

【口上】

終助詞が、話し手と聞き手の双方にかかわるモダリティー要素であることは論をまたない。では、さまざまな終助詞は、どのように、話し手と聞き手にかかわっているのだろうか？

いざそれを考えようとする、とたんに難題が立ちはだかってくる。「よ」と「ね」でいえば、直観的に、「よ」は自分（話し手）、「ね」は相手（聞き手）、かつ話し手は自分が差し出す情報を知っている。これを素性指定すると、

「よ」： [+話し手, - 聞き手]

「ね」： [+話し手, + 聞き手]

これでどう？と言ってみたくなるが、すぐさま反論が。「じゃあ『よね』はどうなるんだ？」

「よね」： [+話し手, - 聞き手, + 聞き手]

ほら矛盾だろ！と。

しかも、自分とはもかく、相手がその情報を“知らない”とか“知っている”なんてどうしてわかるのか？ これも苦しい。

「わたしきれいでしょ？」「うん、きれいだよ」

この「きれいだ」は相手も“知っている”。でもここは「よ」でないとダメ。へたに「ね」なんか使おうものなら、「なによ？はつきり言いなさいよ！」と怒らせてしまう可能性大。

ではこれは？学校の先生がよく使う「ね」。

「簡単そうだけど、この問題は間違える人が多いんですね」

間違える人が多い、なんてことは今はじめて言っているのだから、相手は知るはずがない。しかも教師は、相手がそれを“知らない”ことは承知の上。なのに、「ね」を使うことはまったく問題ない。さて困った、。

話し手と聞き手の関与を正確に取り出す鍵を見つけること。それには、話し手や聞き手が関わる言語行為との結びつきの可否が手がかりになるんじゃないか？と考えました。依頼や命令という言語行為、そこには話し手と聞き手のそれぞれに異なった関与があって、

「～{ *して / *しろ }か」

「～{ して / しろ }よ」

「～{ して / *しろ }ね」

という具合に「か／よ／ね」との結びつきの可否も異なっている。ここから必要十分な素性指定が導けるのではないかと。

終助詞が話し手と聞き手にかかわるモダリティー要素であるなら、その機能はポライトネスとも関係するだろう。ちょっと考えただけでも、

「いつ行きますか？」

「* いつ行くか？」

という具合に、「か」は丁寧体との相性がよさそうに見える。ところがこれまた直ちに反論が。

「じゃあ、あした行きますか？」

「じゃあ、あした行くか？」

を比べれば、「行くか？」と家族を誘うお父さんはいくらもいるではないか、と。

「よ／ね」の方は、もっと直截な結びつきがありそうに見える。

「あのですね」 「* あのですよ」

「あのね」 「あのよ」

を比べてみれば、「よ」と丁寧体との相性の悪さが出るし、。けれども、もちろんそうは問屋が卸さない。「～ですよ」なんて文はまったく普通なわけだから。

そうやって用法を見てゆくと、終助詞とポライトネスの関係は実はとても複雑であることがわかる。「ね」についての研究では、「ね」は文脈次第で「ポジティブ・ポライトネス」にもなれば「ネガティブ・ポライトネス」にもなり、「中立的」なこともあれば「インポライト」になることさえある、という見解まで現れた。でも直観的に、そんな言語形式を人は習得できるのだろうか？という違和感は消えない。

終助詞のとても多様なコミュニケーション機能。それは、語の意味機能が文脈の中で受け取る相対的な含みなのではないか？と考えました。いかに多様に見えようとも、それらは基本的な意味機能と文脈との相関の結果であって、あくまで意味機能から推論できるもの。だからこそ人は、多様なコミュニケーション機能を操ることができるのではないかと。

終助詞の意味機能とコミュニケーション機能を腑分けし、モダリティーとポライトネスを腑分けしたうえで、それらがいかにして統合されるかについて、簡潔な説明を与えたい。それがこの発表の目論見です。